

# 「ひと」「もの」を大切にすることを 育む体験学習

— 幼児期に身に付ける「社会性の芽」—

## 金融教育の現場レポート

「金融教育」は、社会の中で生きる力を育むことを目的として行われる教育です。このコーナーでは、金融教育の授業がどのように進められているか、教育現場に立つ先生や、授業を受ける生徒の姿をレポートします。今回は、新潟県燕市立燕西幼稚園を訪ね、幼児がどのように社会のしくみやルールを学んでいくのか、園児たちの活動の様子と横田和子副園長から伺ったお話を紹介します。

### 幼児が実践できる 金融教育の活動とねらい

幼稚園が実践する金融教育には、どのような取り組みが考えられるでしょうか。幼児には授業形式の指導はなじまないため、体験を通して自然と身に付けさせる工夫が必要です。

燕西幼稚園は平成17・18年度、新潟県金融広報委員会から研究校の委嘱を受け、金融教育活動の「幼稚園における年間指導計画例」を作成しました。「廃品利用活動」「栽培活動」「勤労活動」「買い物活動」に分けられた活動の狙いと内容は下表のようなものです。

#### 【表】金銭教育活動のねらい

##### 廃品利用活動

身の回りの物を使って、試したり、工夫したりしながら制作活動を楽しみ、物を大切に扱うことを知る。

##### 栽培活動

収穫を楽しみに苗を植えたり、草取りや水やりをしたりしながら収穫する喜びを味わう。

##### 勤労活動

先生や友達と一緒に草取りや水やり、片付けなどをし、自分の体を動かして働く(手伝う)充実感を味わう。

##### 買い物活動

欲しいものを買うときは、お金が必要であることを知る。買い物をするときのマナーやルールを知る。

【燕西幼稚園「金銭教育公開保育 in燕 研究紀要」より】

「ただ、金融教育にあたる活動を系統立てて抽出し、4つの分野に分類して新たな指導計画を立案したことは、これまでにない取り組みです」と横田副園長は説明してくださいました。年間計画として学期ごとの活動内容が具体的に立案されています。

### 栽培活動が収穫の喜びに

5月の連休明け、燕西幼稚園では園庭にある自慢の藤の花が盛りを迎えています。その藤棚の横には、4月に植えたジャガイモが芽を出し、大きいものはすでに20センチほどに。その傍らで、年長の5歳児クラスの子どもたち22人がプランターにキュウリ、ピーマン、ミニトマトの苗を植え、枝豆の種を撒きました。

「さあ、お水をあげようか」と言われれば、ジョウロを持って水道を何度も

この計画は燕市の「幼稚園教育年間指導計画案」をベースにしたもので、市内では他の幼稚園も同様の活動を行っています。



新潟県  
つばめ つばめにし  
燕市立燕西幼稚園  
よこたかずこ  
横田和子副園長



玄関の目立つところに大きく貼ってあるポスターには「げんきよくあいざつしよう!」「おかたづけみんなでがんばろう!」「よいこのおへんじ『はい!』」「おはなはし、しずかにきこう!」と書いてあり、園児たちもその意味をよく知っています

真つ赤な実と緑のヘタが付いた絵の下にはしっかりと「とまと」とも書いてありました。

子どもたちは一見、思い思いの行動をしているようにも見えますが、先生の言葉に敏感に反応しながら、自分たちの役割をしっかりとこなしていきます。

この「栽培活動」は7月に収穫して、8月にその野菜でカレーとサラダを作つて食べるまで続きます。



**言葉を掛けてお買い物**

カレーパーティーには育てた野菜以

「枝豆は一粒の種から多くの実をつけます。そんな収穫の喜びを体験した後には、その作物を湯がいたり、ずんだ餅にする家庭もあります。育てたものを家族で食べることが食育にもつながっていきます」

見守っていきます。そして、8月のカレーパーティーでは3歳児がイモ洗い、4歳児はニンジン洗いと皮むき、5歳児は材料切りなど、全員で仕事を分担してカレー作りに挑戦します。火や刃物を扱うため、もちろん保護者の理解と協力も欠かせません」

また、プランターで育てている枝豆は収穫後、各家庭に持ち帰ってもらう予定です。

「毎日水やりをしながら、野菜によって違う色や形の花が咲いたり、実が大きくなる様子を観察します。茎を2本だけに間引いたり、イモを地面から出さないなど、先生や地域の方に栽培方法を教わり、生長を



5月の連休明け、5歳児22名が先生から種の名前を教してもらいながら蒔いていきます。園児たちもそれをしっかりと覚えており、いろいろな作物一つひとつを説明することができるようになります

外の食材も必要です。そのため、8月には、「買い物活動」も行われます。肉やカレー粉、ニンジンやタマネギなどカレー作りに必要なものを、近くのスーパーを利用したり、燕市内で市の立つ日に市場見学を兼ねて買い出しに行き、5歳児が準備をします。

必要なものを必要なだけ買うこと、あるいは何でも欲しいものを買うのではなく、決められた予算内で買うことについての学びとしては、このほかに「遠

足のおやつは200円以内で」と決めて、親子で話し合いながら用意してもらう取り組みでも実践しています。

また、毎年3学期は近くのコンビニエンスストアの協力により、園内に「コンビニ出張販売店」が出現し、お買い物体験。

「事前に子どもたちは、自分が食べたい、肉まん、あんまん、カレーまんのカードを作つて準備をして、楽しみにしています。カードを出しながら『肉まん、ください』、肉まんを受け取つて『ありがとう』と言える。言葉のやりとりを学ぶ良い機会なのです。知らない大人を前にすると言えない子もいるし、緊張してカードと違った注文をする子もいて、そこをお店の方や先生がフォローしながらお買い物を体験します」

こうした活動の成果か、園にあるカートのおモチャの使い方にも変化があるとか。昔はベビーカーに見立てて人形を乗せて遊ぶ子が多かったものが、今は歩きながらいろいろな物を積み込み、「お買い物ごっこ」をする子が増えてきているそうです。

「普段の生活では、家族でスーパ―を利用することが増えたため、お店



の人と話をしながら買い物をする機会は格段に減っているんですね。ですから、こうした『ください』『ありがとう』を経験することも大切です」

誰かに何かをもらつても、「ありがとう」が言えない子、全員一度に働きかけると「言われているのは自分じゃない」とばかりに何も反応を示さない子どもが増えているそうです。

「核家族が増えたせいも、祖父母や家族が多ければ自然に身に付くようなことを体験を通して学ぶ機会が、少なくなつてきています。集団の中で気持ちよくコミュニケーションを取るには、挨拶と返事が一番大切。そんな基本的なことこそ、思いやりの芽を育てるのです」

### 子どもたちの “モチベーションを高める ”保護者と一緒“

「廃品利用活動」は家庭から出る資源ゴミを利用して、子どもたちの工作などに活用する取り組みです。

3歳児は牛乳パックの空き容器を使い、背もたれ付きのイスを作ります。昨年は保護者の協力で218個の牛乳パックが集まりました。

「子どもたちは空き箱を切り開いたり、くついたりしながら、はさみの使い方を覚え、セロテープをうまく使えるようになっていきます。いくつもの牛乳パックをつなげていくうちにイストラしくなつてきて、さらに模様を貼り付けていくと、どんどん愛着もわい

水をやる子、添木をする子、苗を植える子、立て札に野菜の絵を描く子など自分で行いたいことを率先して選んでいます

保護者向けの不定期のおたよりです。3歳児、4歳児、5歳児用それぞれに、行事の際の連絡用に使ったり、イベントや出来事を伝えるために、先生たちが写真やイラストを使いながら手作りして仕上げています



ていくようです。作品展では、嬉しそ  
うに保護者に自慢する姿が見られ  
ましたよ」

同様に、4歳児は段ボールを利用し  
てオモチャ箱。5歳児はペットボトルで  
輪投げを作りました。

「勤労活動」はガラス拭きや園庭  
の草取りが主な活動です。緑と土の  
園庭には毎年多くの雑草が根を張  
ります。園庭の草が伸びてくると、

保護者の方が草  
取りに参加しま

すが、その際は子  
どもたちも、親御  
さんが来るからと、  
ふだんより積極的  
に草取りに草運  
びに大活躍。「いっ  
ぱい草をとろう  
ね！」と、あちこ  
ちで親子の張り

きる様子が見ら  
れる、ほのほのと  
したひとときです。

「廃品集めも草  
取りも、保護者の  
皆さんと一緒に資  
源を再利用して

物を大切に扱ったり、汗を流して働  
くことが、子どもたちには「楽しい体  
験」として強く印象付けられていく  
ようですね」

### 金融教育が生み出す変化を 期待に変えて

毎日野菜の生長を見守りながら、  
水やりの大切さや収穫の喜びを体験  
することで、育てているものを大事に  
する心が育っています。

園で育てたキュウリやトマトなら食  
べられる。最初はそんなスタートでも  
いいのかもしれない。給食に「園庭  
で育てているのと同じ野菜が入って  
るよ！」と先生が言うだけで相当印  
象は異なるのでしょうか。子どもたちは  
他の野菜よりずっと親しみを持って口  
に運んでくれます。

また、保護者が廃品を大切に扱い、  
それで工作を行うことが、子どもた  
ちの物への眼差しを変えていくこと  
も教育現場で目の当たりにすること  
ができます。

「子どもたちは日々の成長のなか  
で、自分が『できた』『わかった』時に  
もっと嬉しそうに瞳を輝かせてく

れます。たとえば、3歳児から5歳  
児までが一緒に過ごす時間は、年下  
の子が『お兄ちゃんのように、あんな  
ふうに縄跳びを跳んでみたい！』など  
と興味を掻き立てられて、子ども同  
士がぐっと接近する機会です。下級  
生が上級生に憧れて目標とし、上級  
生がそんな下級生の面倒を見てあげ  
られる、そんな人間関係が育つ教育  
環境作りが一つの理想だと考えてい  
ます。また今後も、多くの体験を重  
ねるなかで、挨拶やお礼の言葉をしっ  
かり言える子どもたちを育てていこ  
うと思います」

言葉掛けが何より大切」と話す  
横田先生。時代の変化のなかで変わっ  
ていく親や子どもたちの様子を肌感  
覚で知っているからこそ、ブレのない軸  
をお持ちなのでしょう。「まっすぐ目  
を見て『おはようございます！』と元  
気に挨拶しましょう」「『いただきま  
す』が言えても『ちそうさま』を忘  
れるようではいけませんよ」。子ども  
たちに向かつて優しく語りかける、そ  
んな日常の風景の「基本の繰り返し」  
の中にこそ身に付く社会のしくみや  
ルールがあるのだということを、横田  
先生の言葉から感じます。

## 金融教育の現場レポート

# 「ひと」「もの」を大切に心を 育む体験学習

— 幼児期に身に付ける「社会性の芽」—

新潟県

燕市立燕西幼稚園 横田和子副園長